

二強くて二サガ

N E W S A G A

阿部正行

Abe Masayuki

ジルグス王国近衛騎士第二隊の隊長。生真面目で忠義深い。

ゼントス

カイルの幼馴染で、女の子に目がないムードメーカー。

セラン

カイルの剣の師匠にして、セランの養母。

レイラ

ミレーナ

ジルグス王国の王女。王族に相応しい完璧な容姿と気品を持つ。

ウルザ

美しいエルフの精霊使い。カイルの村を訪れ、なほ崩し的に仲間になる。

シルドニア

マジックキング
伝説の『魔法王』が自分の人格や知識の一部を複製した魔剣の精神体。

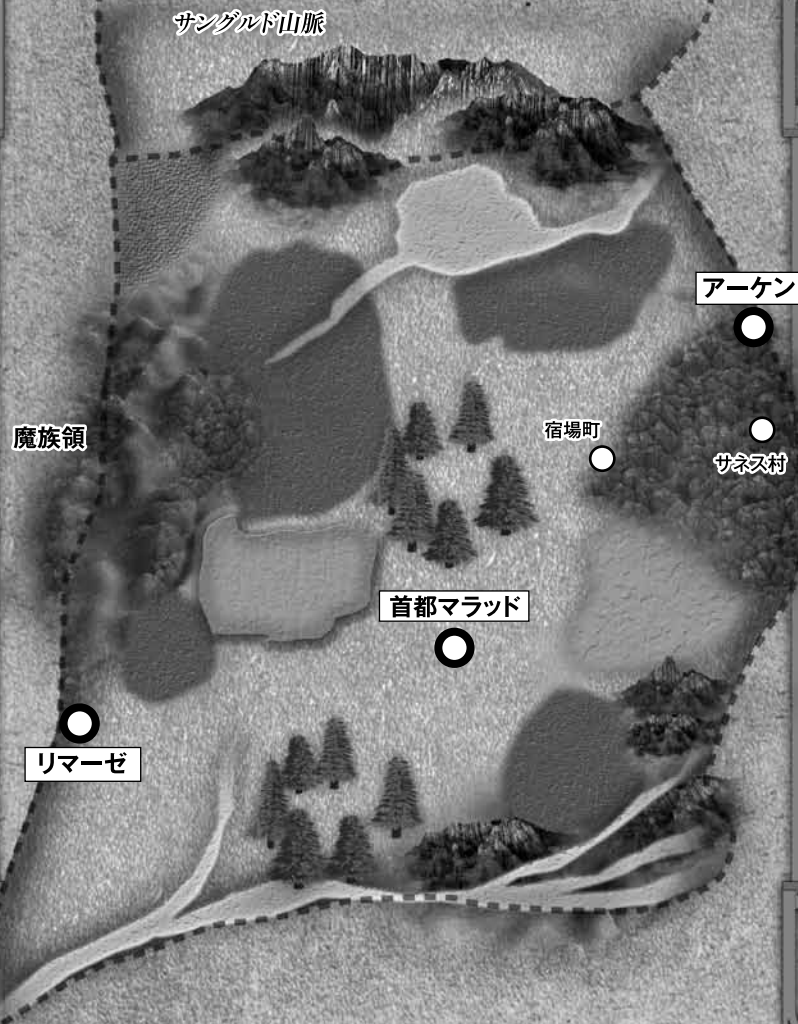
リーゼ

おさなしみ
カイルの幼馴染。格闘の才能があり、その腕前はかなりのもの。

カイル

主人公の魔法剣士。一度魔王を倒したが、真紅の宝石の力で過去に戻り、再び冒険を始める。





プロローグ

光の神々の加護を受けた人間やエルフ、ドワーフといった人^{じんぞく}族。

数は少ないが個々の能力は人^{じんぞく}族をはるかに上回る、闇に祝福された魔^{まぞく}族。

この二つの勢力は巨大大陸ロインダースを東と西に分け、何千年と争い続けてきた。しかし、ここ三百年は今までに無い小康状態を保っていた。

それというのも魔族を率いる王、魔王が比較的穏健な者に代替わりしたためだ。

散発的な小競り合いは起こるものの、いつしか人^{じんぞく}族はその仮^{かり}初の平和に慣れていった。

だがその平穏は、新たに即位した魔王の命令のもと、破られた。

創世暦二八二六年五月。後に『大^{だい}侵^{しん}攻^{こう}』と呼ばれることになる魔族の総攻撃が始まったのだ。

魔族側となりふり構わない、犠牲をものともしない戦いぶりはすさまじく、その頃丁度同族間での争いを激化させていた人^{じんぞく}族は、瞬^{またた}く間にいくつもの国を滅ぼされることとなった。

抵抗した者は皆殺し、降伏した者は魔族領へと強制連行され、当然のように二度と戻ってくるこ

とはなかった。

無論、人族も黙ってやられていたわけではなく、すぐに各国、各種族間で連合軍を作り出した。しかし、本来なら充分対抗できるだけの戦力があつたにもかかわらず、愚かにも主導権争いを起こし、連携がとれなくなつたところをつかれ、主力を各個撃破されてしまう。その後は人族にとって防戦一方の、希望の見えない戦いが続いた。

翌二八二七年四月、ガルガン帝国滅亡。

人族最大の戦力を誇っていた帝国が滅ばされ、後が無くなつた人族側に最後に残されたのは、捨て身の特攻とも言える手段だった。

まず、残存兵力をかき集め、魔王軍本隊に無謀に近い決戦を挑んで、大多数の目をそちらに向けさせる。

その際に、選り抜かれた精鋭を本拠地である魔王城に潜入させ、この絶望の時代の元凶とも言える魔王を討つ、というものだ。

勝算は低くとも、もう他に手段はない、まさに最後の賭けだった。そして人族はその賭けに勝った。かろうじて、だが。



魔王城最深部、魔王の間。

城内でありながらとてつもなく広くガランとしたその空間は、ちよつとした町くらいならすつぽりとしてしまうほどで、目立つものといえば中央の祭壇くらいだった。

その祭壇の前で行われていた死闘——世界の命運をかけた戦いが、たつた今終わりを告げた。立っているのはただ一人、人族の魔法剣士カイル。

白銀の鎧に身を包んだその姿はまさに満身創痍^{まんしんそうい}。千切れかけた左腕などはもはや使い物にならないだろう。立っているのはおろか生きているのも不思議なくらいだ。

だがカイルはなんとか気力のみで立ち、目の前で少しずつ身体が崩れていく魔王を油断無く見ていた。

そして魔王が完全に消滅したのを確認した後、力尽きるかのように床の上に座り込んだ。

「終わった……これで……」

魔族は個々の力が人間よりもはるかに強い反面、利己的な者や個人主義の者が多い。

魔王の圧倒的なカリスマ性と実力によってまとめられていたにすぎない魔軍は、これで統率を失うだろう。

この戦いで多くの死者が出たが、元々数は遥かに人族の方が多いのだ。魔族の被害も大きい状況で、これ以上の侵攻は行われたいはずだ。

人族は救われた。ゆつくりとだがその実感がわいてくる。
だがカイルに喜びは無かった。この勝利のために犠牲になったものの、失ったものはあまりに大きすぎたのだ。

手にしている剣を、いや剣だった残骸を見る。

相棒とも言うべき意思を持った魔剣だったが、もはや物言わぬ柄が残るのみ。

固く閉じられた、外へと通じる扉を見る。

後で必ず追いつく、と追撃を食い止めるために残った仲間達も、結局たどり着くことはなかった。少し離れた床に転がっている世界樹の杖を見る。

ここまで共に戦ってきたエルフの精霊使いが持っていたものだが、彼女は先ほどの戦いで、自らの命と引き換えにカイルを守り、消滅した。

最期に見せてくれた笑顔を思い出すと、涙が一つこぼれた。

守りたかったものはもう何も無い。

生まれ育った故郷も、育ててくれた家族も、心を許し笑い合った友も、共に死線を潜り抜けた仲間も、そして愛する人も……全てを失った。

喜びも達成感も無く、胸にあるのはただただ悲しみと虚しさのみ。唯一の原動力だった復讐心すら無くなった今の自分は、抜け殻のようなものだ。

カイルの身体中につけられた傷はどれも深刻なもので、放置すれば命を奪うだろう。だがそれさえ、もうどうでもよかった。

身体を横たえ、後はゆつくりと緩慢な死を受け入れるだけ、そう思いそっと目を閉じる。

そのまま意識を失えば、ここで全ては終わっていただろう。

それはただの偶然か、それとも運命か。先ほどの激戦のために、宙を漂っていた漆黒の羽毛。魔王の背に生えていた翼から飛び散ったそれが、そっとカイルの顔にかかる。

闇に呑み込まれかかっていた意識がわずかに覚醒し、カイルは薄く目を開けた。視線の先には、この広く何も無い空間で唯一目立つ祭壇がある。

そこに赤い光が見えた。

「……何だ？」

やっとの思いで起こした身体を引きずるようにして、祭壇へと歩く。

そこに飾られていたのは血が滴るかのような見事な真紅の宝石で、大きさは赤ん坊の握りこぶしほどもあるだろうか。まるで脈打つように赤い光を放っている。

カイルも魔法を使う身、それがとてつもない魔力を秘めていることはわかる。

「これは……魔道具^{マジックアイテム}か？」

魔道具とはその名の通り、特定の魔法を込めた道具だ。

思えば戦いの最中、魔王は避けられる攻撃をあえて受けることがあった。

まるで何かを庇^{かば}うような妙な動き。それがあったおかげで薄氷^{はくひょう}を踏むかのような勝利を収められたのだが。

「庇っていたのはこれか？　これを守っていたのか？」

そして魔王が最期の瞬間、命を奪ったカイルではなく、この祭壇を見ていたことを思い出す。

段々と宝石から漏れ出る光が強くなる。まるでその内側から巨大な力があふれ出ようとしているかのようだ。

「魔王がいなくなったことで制御がきかなくなったのか？」

おそらくこれは製作途中。このままではいずれ暴走し、込められた魔力に比例した大破壊を起すだろう。

振り返ってみても、どうしてそんなことをしたのかわからない。

その美しさに、この世のものとも思えない妖^{あや}しさに魅^ひかれたのだろうか？

ただ早く楽になりましたかっただけだろうか？

とにかく無造作とも言える動きでカイルはその宝石を掴^{つか}んだ。

その瞬間、爆発的な赤い光が手の中からあふれ出し、カイルを襲った。

それはあつという間にカイルを包み込み、更に周りを赤一色に染め上げた。

そうして、カイルは何もわからなくなった。

顔に注ぐ優しく暖かな光によって、カイルは目覚めた。

「……ここは？」

身体を起こし、周りを見渡しながらかすれた声でカイルは言った。

見知らぬ場所だったというわけではない。むしろここほど見慣れた部屋はなかった。

壁には子供の頃父親からもらった練習用の模造剣が立てかけてあり、本棚には母親から奨められた本が並んでいる。そして愛用していた机や椅子も記憶通りの位置にあり、今寝ているベッドも間違ひなくかつて自分が使っていたものだ。

見間違えるはずもない、今まで生きてきた時間の大半を過ごした場所。ここは一年前に魔族の大侵攻によって滅ぼされたはずの故郷にあった、自分の部屋だ。

「俺は……一体？」

寝起きのためか普段の十分の一も働いていない頭で状況を理解しようとしていると、勢い良くドアが開いて、元気な声をかけられた。

「いつまで寝てんの？ 早く起きなさいよ」

入ってきたのは十代半ばくらいの少女。少々癖のある長い赤毛が特徴的で、はきはきとした言動は生命力にあふれ、見ているこちらが元気になってくるようだ。

「リーゼ……」

生まれてから顔を合わせない日のほうがはるかに少なかった、家族同然の、そして二度と会えないはずの幼馴染の名を呟く。

「何だ、起きてたの。まったく……今日から十六歳なんだからもっとしっかりしなさい」

腰に手を当て偉そうに言う。

この少女は昔からそうだった。ほとんど同じ年なのだが、数ヶ月早く生まれたことを理由にカイルを弟のように扱うのだ。

カイルはリーゼの顔を見てしばらく呆然としていたが、はっと気づいて、

「ああ、夢か……」

と、力なく笑った。

とても嬉しく、そして残酷な夢だ。

世界を救った褒美として最期の瞬間にこの夢を見ているのだとしたら、実に皮肉がきいている。なんでもない、それでいてかけがえない平穏な日常。失って初めて気づく大事な日々。

だが夢でも幻でも良かった。たとえ僅かな時間でもあの時に帰れるのなら……

「カイル？」



リーゼは様子のおかしい幼馴染を見て怪訝^{けげん}な声を出す、それに構わずカイルはベッドから身を起こして近づいていく。

「どうしたの？」

息がかかるのではないかというくらいまで近づいてきたカイルを見て、更に怪訝そうに眉をよせるリーゼ。

それにも答えることなく、カイルは有無を言わずリーゼを抱きしめた。

「カ、カカカカカイル!？」

「リーゼ! リーゼ! リーゼ!」

名前を繰り返して呼び、この時が一秒でも長く続いてくれと願いを込めながら強く抱きしめる。「ちょちょちよつと、い、いいいいい一体何なのよ!？」

リーゼが抜け出ようとカイルの腕の中でもがくが、混乱しているためかその力は弱々しい。

「あ、あう……」

やがてその抵抗も無くなり、リーゼは顔を真っ赤にしながら大人しくなる。

しばらくして、カイルは違和感に気づいた。

身体全体で感じるリーゼの体温、髪の毛から漂^{ただよ}う彼女の愛用していた花の香料の匂い、耳元で聞こえる「い、いきなり……」や「こ、心の準備が……」といったか細い声。

それらが段々と頭を覚醒させていく。

「あれ？」

夢にしては妙に現実的だ。

リーゼの背中にまわしていた左手を、あるものを確かめるために下のほうに動かす。そして手に触れたそれを少し強めに掴んだ。

「ひっ!？」

びくり、とリーゼの身体が大きく反応する。

「あれ？」

温かくそして柔らかい、非常に手触りのいいそれを、思わず揉んだ。

「え？ あ？ やっ、やだ、ちょ……ん！」

リーゼが酷く狼狽した声を出す。

そういうえば同年代と比べて大きめの尻を気にしていたなあ、とカイルはかなりはつきりしてきた頭で思い出した。

この時カイルは失念していた。

起床したばかりの生理現象として、身体のある部分が『元気』になっていたことを。

そして同世代の異性の尻を揉みしだくという行為に反応して、無意識にその部分がもつと『元気』になっていくのを。

更には抱きしめているという体勢なのだから、当然リーゼもその『元気』な部分に気づく。むしろ押し付ける状態となっていたのだ。

「!？」

リーゼの赤かった顔が一気に青ざめる。

「イ、イヤアアアアアアッ!!!」

驚異的な力でカイルを引き剥がし、腰を少し落として手首を鞭のようにしならせる。腕の力だけでなく、足の親指から腰の捻りを加えて身体全体を使った平手打ちを、カイルの顎に見事な角度で打ち込んだ。

カイルは身体をコマのように回転させながら宙を舞い、本棚に突っ込む。

「あ、朝っぱらから何すんのよ！ バカ！」

リーゼは少し涙目になりながら大声で言い、扉を乱暴に閉め出て行った。

カイルは逆さまで本に埋もれながら、顎だけでなく首に来る痛みによって完全に覚醒した頭で、ようやく違和感の正体に気づいた。

「あれ……？ これ夢じゃなくね？」

その途端、目が覚めた時から握り締めたまま強張っていたカイルの右手が、ゆっくりと開く。コトリと音を立て床に落ちたのは、あの祭壇に飾られていた、血の滴るかのような赤い宝石だった。

「夢、じゃないな」

ベッドに腰かけ、いまだにズキズキと痛む顎と首をさすりながらカイルは呟いた。

「ここまで痛い夢はないはず……だが、だとしたらどういうことだ？」

意識ははつきりしたが、現状がまるで把握できない。

確かに自分は魔王城で魔王と戦いかるうじて勝ったが、瀕死の重傷を負っていたはず……夢じゃないとしたら一体この状況は何なのだろうか？

「催眠や幻覚じゃない。俺にはそうそう通用しないし……第一、魔族の仕業なら死にかけていた俺に止めをさすのにこんなことをする必要はないはず」

そこまで考えた後で左腕を確認する。特に重傷で、使い物にならないくらいだったはずだ。

「治って……いや違うな」

あれほどの傷だ、たとえ最上級の回復魔法を使ってもしばらくしびれるだろうし、傷跡も残る。これは経験から言って間違いない。

だが左腕はきれいなもので、何の不自由もなく動く。まるで初めから傷など負っていないかのよう。

全身にあった無数の傷も消えている。軽く身体を動かしてみると非常に調子よく、ここしばらくあつた身体の痛みや倦怠感なども綺麗に消えている。

カイルは少し考えた後、意を決して部屋を出てみた。部屋の外はやはり記憶通りの間取りで、確

認すればするほどかつての家そのものとわかった。そして応接室にある鏡を見て確信を得る。

「やっぱりそうだ……若返っている」

戦いの日々で自分の誕生日の事など忘れていたが、二十は過ぎていたはず。だが鏡に映る自分はせいぜい十代半ばで、身体中の傷跡も消えている。

滅んだはずの故郷、死んだはずの幼馴染、若返った身体、そして先ほどのリーゼの言葉……これらを全部説明できる仮説は一つしかない。

「……過去なのか？ 俺は過去に來たのか？」

ポケットに入っていた赤い宝石を取り出す。相変わらずこの世のものとは思えない妖しく美しい輝きを放っているが、あの時の途方もない魔力は感じない。

「いや、だがそんな馬鹿な……過去に戻る魔法なんてあるはずが……だが他に説明が……」

カイルはしばらく頭を抱えていたが、自分の腹の音で空腹を自覚し苦笑する。

「どんな状況でも腹は減るな……いや正常である証拠とおもう」

何かあるだろうと思いつつ台所に行くと、ちゃんと食事の支度しどがしてあった。

テーブルの上には焼きたてのパンに干し肉と野菜の入ったスープ、スクランブルエッグ、サラダ、果実のデザートと、朝食の割に手の込んだ料理だ。

「リーゼが用意してくれてたのか」

家事が苦手なカイルとその家族に代わり、よく料理を作ってくれていたものだ。彼女には全員頭

が上がらなかったことを思い出しつつ口に入れる。

懐かしい味だった。この一年どうしても食べるのできなかった、忘れられない味だった。

「冷める前に……食べてしまおう……」

思わず涙がこみ上げてきそうになったのを誤魔化すかのように、カイルは猛烈な勢いで食べ始めた。

「さすがに食いすぎたな」

空になった皿を見ながら、カイルが苦しそうに言う。かなりの量があつたが、止まらなくてつい残さず食べてしまったのだ。

「食い終わった後で何だが、明らかに一人前の量じゃなかったな……うん？」

その時、玄関の方から音が聞こえ、人が入ってくるのがわかった。

一瞬警戒しかけたが、すぐに誰か理解する。よく知っている足音と気配でその人物は、まっすぐ台所に向かつてきた。

「うゝす」

入ってきたのは、短いくすんだ金髪でそれなりに整った容姿でありながら、近所の悪ガキがそのまま大きくなったような男。動きやすい服を着て腰には安物の剣をさしている。

「セラン……」

リーゼと同じカイルの幼馴染で、腐れ縁の悪友だ。その腐れ縁は人生最期の瞬間まで続いた。

「お、何だ珍しいな、朝に弱いお前がもう起きてるなんて」

「あ、ああ……あ、あのそのえつと……げ、元気だったか？」

「昨日も会っていて何を言ってるんだ？」

セランは不思議そうな顔で答えた。

カイルは呼吸を整え、落ち着いてセランの顔をよく見た。やはり違う。

「……間の抜けた顔は一緒だが、最近のセランにはまだ経験による凄みのようなものがあつた。だ
が目の前このいつは、昔通りのただのダメ人間のままだな……」

「何かよくわからないが侮辱されてることだけはわかった」

それに若い。おそらくは今のカイルと同じ年だ。

さつきは混乱していて気づかなかつたが、リーゼも記憶より若かつた気がする。

「まあ今はお前に構っている暇はない、さて朝メシ、朝メシ……って無い!？」

セランが空の鍋を見て愕然とした声を出す。

「お前、まさか全部食べたのか!？」

「ああ美味かつたぞ」

そういえばよく飯をたかりに来てたなこいつ、とカイルは思い出す。

「くそ、リーゼがなにやら昨日から手の込んだ仕込みをしていたようだから、たかろうと思つて来

たのに……あいつ凶暴だけど料理の腕はいいから、楽しみにしてたのによ」

未練がましく鍋についた残りを指でとって舐めているセランに、カイルは確かめてみた。

「あゝ、ちょっと変なこと訊くぞ。今日はその……何年の何日だ？」

「うん？ 本当に変なこと訊くやつだな、二八三年五月二十四日だろうが」

やはり四年前の日付。本当にここは過去のようなのだ。

「……間違いないのか？ 本当に？」

「何でそんなにこだわるんだ？ 間違いないはずだが……」

そこまで言ってセランは「ああ」と手を叩いた。

「そういえば今日はお前の誕生日か、野郎の誕生日なんか完全に記憶から消してたな……何だ、祝ってほしかったのか？」

「いや、俺も野郎に祝われる趣味はないからいい」

セランは鍋の残りを全て取り終わると、仕方ないとばかりに言った。

「しょうがないな、朝飯は誕生日プレゼントでことで我慢してやるよ」

「安くないか？ おい。というか元々お前のじゃないだろう」

カイルの言葉を無視してセランはさっさと出て行こうとしている。

「どこ行くんだ？」

「メシが無いならここに用は無い。仕方ないからリーゼのとこ行って何かもらってくる」

やっぱり美味かったしなあ、とも呟く。

「地面に頭こすりつけて頼み込めば、一食分ぐらいなら恵んでくれるだろう。何だかんだ言っても甘いところがあるからな」

なんとも情けないことを臆面も無くセランが言う。

「昔から……じゃない、相変わらず目的のためなら手段を選ばないし、プライドも捨てる奴だな」

「そう褒めるなよ」

「褒めてねえよ」

「あ、俺の誕生日は八の月二日だからな、プレゼントは貴金属類かい女でよろしくな」

ひらひらと手を振りながらセランは出て行った。

「あいつは変わらないと言うべきか、変わってないと言うべきか」

カイルはセランの背を見送り苦笑する。

こんなやり取りも久しぶりだった。かつては何気ない日常の一つだったのだが、今はそれがたまたまなく楽しく嬉しかった。

「さて……これからどうしたものか」

過去に來たのは間違いなさそうだが、どうやって過去に來たのかはまったくわからない。

一人で考えていても答えは出ないだろう。できれば誰かに相談したいところだが、事が事だけに下手な相手には話せない。

「……やっぱり相談できそうなのは一人しかいないな、起きてればいいんだが」
どうしたものかと頭をかきつつも、とりあえずカイルはその人物の元へと行くことにした。

カイルの住むレナード家はジルグス王国にあるリマーゼの街の外れのほうにあり、このあたりではちよつとした豪邸として知られている。三階建てで庭も広い。カイルはその庭の隅にある離れへと向かった。

離れは石造りの頑丈な平屋だが窓が一つも無く、扉を開けるとすぐに急な下り階段になっている。地下一階にある頑丈な扉を開けると、この部屋特有の懐かしい匂いがした。

部屋には本棚が所狭しと立っており、本もぎつしりと詰まっている。

窓の無い壁には、【ライト】の魔法が込められていて半永久的に光る魔道具がある。これは本にダメージを与えないよう明るさを調節している特注品だ。

この半地下状の書庫は日光や湿度、温度など本の大敵になるものは全て排除するよう、見た目からは想像もできないほど高度な魔法と金がかけられていた。

肝心の蔵書も、子供向けの絵本から古代魔法王国期の禁書まで、幅広くそろっている。

部屋の中央にあるテーブルには、山のように本が積まれていた。そこに半ば埋められるような格好で本を読んでいる女性のカイルに気づいて顔を上げ、にっこりと微笑んだ。

「あら、カイルちゃん。ここに来るとは珍しいわね。しかもこんな時間に」

いた、いてくれた。

いるだろうとは思っていたが、実際に会うとやはり胸にこみ上げてくるものがあつた。

そんな内心を隠しつつカイルは話しかける。

「もう朝だよ。また徹夜で本読んでたのかよ、母さん」

「え？ あ、もう朝なの？ ……やっぱりここだと時間がよくわからないわね」

欠伸をしつつ答えたのはカイルの母セライアだ。

童顔で髪を短く切りそろえており、小柄なのも相まって実年齢よりはるかに若く見える。とつくに三十はすぎているはずだが、カイルと並んでも、親子ではなくせいぜい姉弟と言ったところだ。

「ちよつと質問があるんだけどいいかな？」

カイルの言葉に、セライアはきよとした顔で息子を見る。

「ますます珍しいわね、私に聞きたいことがあるなんて……あ、お父さんとの出会いの話ならいくらでもするわよ。あれは今から二十年前の……」

「それはまた今度で」

嬉々として話し出そうとする母を止めるカイル。

父との馴れ初めの話は喋り出すと何時間も続くので、カイルにとっては小さな頃からのちよつとしたトラウマだ。

「聞きたいのは魔法のことなんだ」

「魔法のこと？ 私でわかるかしら？」

「母さん以上に詳しい人はそういないだろ」

魔法には大きく三つの系統がある。

神々の力を借りて奇跡を起こす神聖魔法。

精霊を役立て主に土水風火に作用する精霊魔法。

そして古代魔法王国期に開発され、学問の要素を多分に含んだ古代語魔法。

この内人間が使うのは主に神聖魔法と古代語魔法で、セライアは古代語魔法の使い手だ。

古代語魔法は大まかに最下級魔法、下級魔法、中級魔法、上級魔法、最上級魔法、特級魔法という六つの難易度に分けられており、使いこなせる魔法により使い手には称号が与えられる。

最下級魔法を使える者は『呪い士』^{マジシャン}、下級魔法で『妖術士』^{ソイサラー}、中級魔法で『魔法使い』^{ウィザード}、上級魔法で『魔道士』^{メイジ}、最上級魔法で『大魔道士』となる。

特級魔法の使い手ともなると人族全体でもそれこそ数えるほどしかいないので、個々の称号を持つている。有名なところではスーラ聖王国の『輝かしき』^{グロリエス}サキラ王女がいる。

そしてセライアは、大国でも数人しかない『大魔道士』にあたる。

嘘か誠か、ガルガン帝国の宮廷魔道士に最年少で推挙されたこともあったらしい。

だが現在では若い頃に稼いだ分と、カイルが生まれる前に亡くなったといふかなりの資産家だった祖父の遺産で、道楽の本集めをしながら暮らしている。

何故こんな辺境の街で隠居生活をしているのかはカイルも知らないし、聞いてもはぐらかされるだけだった。

ただ、魔法のことを訊くのにこれほど相応しい相手はいない。

「あの……過去に戻る魔法なんてあるのかな？」

「あるわよ」

セライアは何でもないことのようにあっさりと言った。

「あ、あるの!？」

「ええ、あまり知られてないけど時間に干渉する魔法は確かにあるわ」

「だけど聞いたことさえないぜ。そんな便利な、いや反則な魔法は」

「それも当然ね。何故なら、あるというだけで誰も使うことができないのよ。詳しい理論を説明すると何日もかかるから省くけど、時の流れに干渉する魔法理論は既に見つかっているの。使えないのは単純に魔力量の問題ね」

魔力とは魔法を行使するためのエネルギー源であり、魔法を使う者は必ず持っている。

「もし時間の魔法にランクをつけるなら特級魔法の十ランク以上は上になるわ。人間どころか竜や神だって使えない。時の流れを大河としたら、人間なんてせいぜい蟻ぐらいなのよ。蟻が川の流れをどうにかできると思う？ 歴史上もっとも偉大な魔法使いが命を削るように魔力を振り絞っても、刹那の時を変えることすらできないでしょうね」

だから知っている人さえほとんどいないのよ、とセライアは言う。

「なるほど……じゃあもし数年過去に戻るとしたらどうすればいい？」

「年単位？ それこそ途方もない魔力が必要になるわ。一度にそんな魔力を確保するのは……どう考えても不可能ね」

というか考えるまでもないわ、と頭から否定する。

「それじゃあ……魔道具マジックアイテムを利用した場合？」

カイルの言葉に、ああ、とセライアが声を上げる。

「なるほど、面白いわね。魔道具マジックアイテムなら魔力を保存できる……手間や時間はかかるけど、時間魔法に限って言うならそっちのほうがいいわね。でも……」

セライアは、うーん、としばらく考えた後、やっぱり無理ねと首を振る。

「少し考えただけでも問題はいくつもあるわ。まず込める魔力の確保ね。時間をかければ用意できるかもしれないけど、一人だと『大魔道士』アークトメイジクラスでも千年かけたって無理ね」

「……もし、禁呪きんじゆの儀式を使ったら？」

禁呪の儀式、それを聞いたセライアの顔がくもる。

「ええ、確かにあの外法げぽうなら大量の魔力を集められるわね……どこで知ったの？」

禁呪の儀式とはいわゆる生贄いけにえの儀式というやつだ。命を魔力に変換することで、莫大ばくだいな魔力を得られる。生贄自体は魔法を使えなくても問題ない。かつて闇に落ちた魔法使いが、村一つを犠牲に

して邪悪な魔法実験を行うという事件もあった。

そのため禁呪の儀式については、存在することすらあまり明らかにされていない。

「ちよっと本で読んだだけだよ。詳しくは知らない」

カイルの経験したあの戦いの末期、魔族に対抗する手段がなくなった人族は、この禁呪に手を出そうとするまでになっていた。

もっとも実行する前に更にどうしようもないところまで追い込まれ、あの特攻という最後の賭けに出たのだが。

「そう……けどたとえばその禁呪を使っても無理よ。年単位の時を戻すのに必要な魔力ともなると、この大陸の人族が半分は必要になるわ」

「……そうだね、人族半分を生贄にした魔道具作成なんてできるわけがない」

つまりそれだけの数を犠牲にすれば必要な魔力量は集まるということだ。

カイルは魔王城の周りに積み上げられた、山脈と言っているほどの死体を思い出す。

大陸中から捕虜として連行された人族の成れの果て。それらが全て、生命力を吸い取られて枯れ木のようになっていたのを。

「もう一つの問題は触媒ね。普通の魔法ならそこらの魔石なり宝石なりで大丈夫でしょうけど、それだけの魔力に耐えられる触媒は存在しないでしょうね」

魔力を受け入れる触媒には、魔石と呼ばれる特殊な石や宝石が使われることが多い。

だが受け入れられる量にはそれぞれ限界があり、それを超えれば壊れて魔力が暴走、爆発するということになる。

「もし可能性があるとすれば……伝説の『神竜の心臓』くらいね」

そう言うとセライアは、乱雑に積まれた本の山の中から一冊の古い本を取り出す。どうやら無秩序に見えても、本人は置き場所を把握しているらしい。

「ああ、これこれ。これが『神竜の心臓』よ」

開かれた本には、『神竜の心臓』に関する逸話と宝石の絵が載っていた。

はるか太古、神々よりも力が上とさえ言われた竜がいた。

その竜の遺骸には悠久の時を生きた神をも超える力の残滓^{ざんし}が残されていた。それを手に入れたのが、人間の古代魔法王国ザールレス。

そしてザールレスは、遺骸から途方もない魔力を秘めた『神竜の心臓』を抽出することに成功する。無尽蔵とも言うべき魔力を手に入れたことにより、ザールレスは千年もの間、繁栄し続けた。

ただその『神竜の心臓』の魔力も千年以上もの間使われ続け、ついに枯^こ渇^{かつ}する。

それが人族の歴史上もつとも栄華を極めた、古代魔法王国ザールレスが減んだきつかけだった。

「で、空っぽになったんだけど、空になっただけだからそれに魔力を込めることもできるの。おそろく最高の器になるわ。ただザールレスが減んだ時に行方がわからなくなつて、もう千年近くになるわ。まだ現存してるのかしら？　もしかしたらもう人族の手元にはなく魔族の領域にあるかもね」

「なる、ほど、ね……」

カイルは無意識に、ズボンのポケットの上からそれを握り締めた。

目の前の絵にそっくりな、あの宝石を。

「つまり数年過去に戻るとしたら、伝説の『神竜の心臓』を用意して、この大陸の人族半分くらいの生贄をささげる……こういうこと？」

「そうなるわねえ。ね？　そんなの不可能でしょう？」

「うん、そりゃ不可能だ……」

カイルはセライアと目を合わさず呟くように言った。

「しかし妙なことを聞いてくるわね。まるでカイルちゃんが未来から来たみたいじゃない？」

「はははなにをいっているんだよそんなことあるわけじゃないじゃないか」

「それもそうよね、安心したわ」

あははは、と二人で笑い合った（カイルのほうはかなり乾いた笑いだった）。

「それにしてもカイルちゃんとこんなに長くしゃべったのは久しぶりね」

「そう……だったけ？」

「そうよ。だって最近カイルちゃん、明らかに私のことを避けてたもの」

「あゝ、そんなことはないつもりだったけど……」

そういうばそうだったな、とカイルは思い出す。

丁度これくらいの時期は、たいした理由もなく母親を避けていたのだ。

思春期と言ってしまうばそれまでだが、今となっては何故そんなことをしたのか自分でもよくわからない。

「まったく寂しかったわ。息子に嫌われるなんて母親失格じゃないかと思ってたんだから」

「あゝ……確かに母さんは見た目も態度もなっていないと思う。ずぼらだし出不精だし、本のこと以外はろくに興味を持とうとしない。家事もだめだし母親らしいことはほとんど苦手ときている。世間一般からすれば、とてもじゃないが立派な母親とは言えないな」

「うん、自覚はあったつもりだけど、我が子に真顔で言われるとさすがに傷つくわね……」

「……それでも俺にとってはただ一人の母さんだし、これ以上の母親はいないよ」

この人を二度と失いたくはなかった。

「もう、可愛いこと言ってくれるわね」

セラリアが笑顔でカイルを抱きしめる。

背も体格もカイルのほうが大きいから、抱きつく形になる。以前のカイルだったらすぐに離れただろうが、今は懐かしさと嬉しさと照れくささとで、涙をこらえるのに必死だった。

「さて話していたらお腹すいちゃったわ。確か今日はリーゼちゃんのご飯作ってくれてるはずよね。あの子料理上手だからね」

楽しみだわ、と足取り軽く家に向かおうとするセラリアを見て、カイルの顔が引きつる。

「あ……ごめん、つい全部食べちゃった」

カイルの言葉にセラリアの笑顔が凍りつく。

「……そう、それじゃあしょうがないわね。母さんはいつも通り保存食でもかじるから、ふふふ」

「いや、そのごめん、ほんと」

「ううん、いいのよ……ああ、そういえば今日はカイルちゃんの誕生日よね。朝ごはんは誕生日プレゼントにあげるから……ふふふ」

「いや、だから安くないか？ 俺の誕生日プレゼント」

2

リマーゼの街の東には小高い丘があり、その上にはほとんど朽ち果てた古い遺跡がある。

それでも石造りの土台部分はある程度残っているため、子供達の格好の遊び場となっていた。カイルもよく隠れんぼをしたりして遊んだものだ。

その遺跡の上部に上り、カイルは夕日を見ていた。

街全体を見渡せるほど見晴らしがよく、ここから見る夕日が好きでよく訪れていたのだ。

こんなにも穏やかな気分で夕日を見ることなど、この街が減んで以来一度もなかった。

「まさか、またこんな夕日を見られるなんてな」

街全体を紅く染め上げる夕日を見ながら、カイルはポツリと呟く。

「……いかな、今日だけで何回泣きそうになってるんだ」

思わずまた涙ぐみそうになったが、まあ今日ぐらいは仕方ないよなと、自分を納得させた。

カイルはポケットから『神竜の心臓』を取り出してみた。

「過去に戻る……あいつは何をやり直したかったんだろうな？」

時間移動をしようとしていた魔王のことを思う。

「やり直す……か」

血のように赤い『神竜の心臓』を見つめながら呟いた。

「ここにいたの、探したわよ」

突然の背後からの声に、カイルは急いで『神竜の心臓』をポケットに隠す。

振り返らずとも誰かはわかった。リーゼだ。

声色からして不機嫌なこともわかる。そして今朝のことを思い出す。

（起床直後に問答無用で抱きつき、そのまま尻を揉みしだいて更には股間を押し付ける……）

「ごめんなさい」

カイルは振り返りざま、即座に土下座して謝った。

はたから見れば今朝の行動は完全に性犯罪者のそれで、牢屋行きになってもおかしくない。

「……反省はしてるのね」

「妙な夢を見たのと寝ぼけていたのが重なってあんな奇行をしてしまった。反省している」

地面に顔をすりつけたままとにかく謝罪をしていると、リーゼが大きくため息をつくのが聞こえる。

根負けして許した時の合図、と判断したカイルが身体から力を抜く。

「まったく、二人共初めからバカなことしなければいいのに」

「二人？ ……ああ、セランか。あいつやはりお前のところにたかりにいったか」

「ええ、今のあんたと同じように土下座してたわ。ほんと似た者同士ね」

呆れたように言いながらリーゼがカイルの隣に座った。

カイルも座り直し、二人で並んで夕日を見る。

「あいつと同じと呼ばれることぐらいの侮辱はない気がするが……で、恵んでやったのか？」

「さすがに哀れになってね……それよりほんとに全部食べたの？ 四人分ぐらいは用意したのに」

「ああ、ついな。あんな美味いのを食べたのは一年ぶりだから」

「十日ぐらい前にも作った気がするけど……セランはともかくセラリアさんまで『何か食べさせて』と来た時にはどうしようかと思ったわよ」

「……うちの母が迷惑かけてすまん、いやほんとに」

カイルが心からの謝罪をする。

「ロエルおじさんが帰ってくるまでは、仕方ないから作りに行つてあげるから感謝しなさい」
「ロエ……？ ……………あゝ親父か。家にいなかったな、そういえば」

完全に忘れていたな、と影の薄い父親のことをカイルはようやく思い出した。

カイルの父ロエルは細工師で、主に指輪や首飾りといった装飾品を作っていた。

腕はいらしいがその分作品作りには時間がかかるので、知る人ぞ知る、という評判らしい。

無口で線の細い、いつも静かに笑っているような人なので、とにかく目立たない。

家事がまったくできないセラリアとカイルの代わりに家の細々としたことをする、はたから見ればほとんど主夫のような人だった。

たまに何日かかけてこの国の首都に納品に出ることがあったので、おそらく今回もそれだろう。

「……あんた今おじさんのこと忘れてなかった？」

「そんなことはない、ちよつと思ひ出せなかったただけだ。まあそんなことよりもだ……」

父親の話を『そんなこと』ですますと、カイルは一年前まで日常だった他愛ない会話を続ける。

この一年ずつと求めてやまなかった穏やかな時間が流れ、自然と笑顔になりながら、目の前の幼馴染と話し続けた。

「そういえばよく俺がここにいてるってわかったな」

「あんたの行動なんて全部お見通しよ……ところで、今朝の夢つて何見たの？」

リーゼの何気ない言葉にカイルの笑顔が固まる。

「もしかしてあたしが死ぬような夢でも見たの？」

「まあ……そんな、ところだ」

「そっか、それであんなに取乱したんだ……」

そっけないふりをしつつもどこか嬉しそうなリーゼ。

その顔を見たカイルは、リーゼの死を思い返した。

一年前、今の状況で言うなら三年後に、魔族領に近いこの町は魔族の大侵攻で真っ先に狙われた。緒戦の見せしめだったのだろうか、徹底的に破壊され、焼き払われ、住人は皆殺しにされた。

目の前の街が地獄と化したのだ。あの時の惨状は決して忘れられない。

そしてリーゼも……

駆けつけた時にはすでに手の施しようがなかった。

最期に見せてくれた弱々しい笑顔、腕の中で徐々に失われていったぬくもり。

喉がかれるまで声をかけ続けても、二度と開かれることのなかった瞳……

思い出すだけで、全身の血が逆流するかのような怒りが込み上げる。

そして誓ったのだ、どんなことがあろうとも必ず仇を討つと。かたき

「ど、どうしたの？ 顔色が悪いわよ？」

リーゼの声でカイルは我に返る。

「いや……何でも……ない」

「汗もかいてるし」

「ちよつと気分が悪くなったただけだ、問題ない」

「なら……いいんだけど……」

口では何ともないと言うものの、カイルの突然の変化にリーゼは困惑している。

正確に言えば、リーゼは怖かった。

カイルのこんな顔は初めて見た。怒りでも悲しみでも憎しみでもない、言葉では表せない深い闇のようなものを感じさせる表情だ。

カイルのことは何でも知っている、ついさっきまでそう思っていたのに。それを根底から覆されたような思いだった。

カイルは改めて今の状況を、この奇跡のような平穏を思う。

（確かに今は平穏だ……だがこの平穏は三年後に終わる。これを知っているのは自分だけ、何もしなければ、またあの繰り返しになる……あの光景をもう一度見ることになる）

「させるか……」

「ど、どうしたの？」

急に立ち上がったカイルにリーゼは少し心配そうに声をかけるが、カイルはそれに答えず、まっすぐ夕日の沈んだほうを見ていた。

このままいけば家族も、故郷も、世界も、そして目の前の幼馴染も、全てを失ってしまう。

カイルは、碎けてしまいそうなほどに歯を食いしばる。

「変えてやる……」

あの時こうしていれば、他に良い方法があったのでは、と後悔ばかりの一年だった。

絶望のさなか誰かが言っていた。こうなったのは運命だ、^{あらが}抗いようのない運命だと。

その言葉通り、諦めて受け入れるしかない運命として、自分を納得させていた。

「なら運命を変えてやる」

今、奇跡的にも、やり直すことができるのだ。

この希望は絶対に離さない。

「あんなくだらない運命を、この世界の運命を変えてやる」

血が滲むのではないかというくらい強く握り締めた拳を、地平線の夕日が沈んだ先に突きつける。

その方向は西——すなわち魔族領の方向だ。

「俺が、必ず、どんな手を使ってでもだ！」

カイルが一年前のあの日、リーゼを失って以来二度目の決意を固める。

あの時は復讐、今度は守るための決意を。